

---

# 一週間

NAO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一週間

### 【著者名】

N4763A

### 【作者名】

NAO

### 【あらすじ】

大好きだった祖母の死。蝉の鳴き声が、俺を包んでいく…。一週間、それは蝉が謳歌する時間。祖母が100歳を迎えるはずだった誕生日までの時間。

## (前書き)

共同企画小説。テーマは『一週間』。共同制作の先生方の作品は「週間小説」で検索すると見ることができます。

蝉の鳴き声が聞こえる。

甲高く、それでいて耳障りだ。うだるような夏の暑さ、肌を焼く日差しが、俺を溶かしていく。

田舎に帰ってきた俺は、軒下に座つて庭に生える大きな木を見つめている。真夏の太陽が、黒い服を身にまとう俺を焼き飛ばす。

「孝介、今日は疲れたでしょう？」

「……いや、別に」

母が俺を気遣う。

「なら……いいのよ。それじゃ、私は挨拶してくるから」

俺の肩に手を置くと、手に持っていた数珠が鳴った。喪服を着た母の額には、大粒の汗が浮かんでいる。

「疲れてなんかないぜ」

俺の答えに安心したように、母は小さな笑みを浮かべて去っていく。

庭で一番太い木に向かつて、蝉が飛んできた。

音もなく木に張り付くと、すぐに大声で歌い始める。一回り大きな歌声が、耳を貫いた。

孝介や、これでアイスクリームでも食べなさい。

「楽しみだつたな、お金もらえるの……」

祖母は俺が田舎を訪れるたびに、母の目を盗んで、お金を握らせてくれた。嬉しそうにお金を眺めていた俺を発見した母は、祖母に向かつてよく注意したものだ。

お小遣いは貰っているんですから、むやみに貰えないでください」と。

「アイスクリームか……一百円で十分なのにな」

千円をくれるその暖かい手が、いつしか楽しみになっていた。母の実家であるこの田舎を訪れるたびに、俺はお金をもらえたと思つ

て嬉々として母についていった。

太い木に取り付いた大量の蝉。下手くそな合唱は、途中で脱退するメンバー、参加するメンバーが相次いでいて、まったくまとまる気配がない。自己中心的なメンバーばかりだ。

「お兄ちゃん、ここにいたんだ。おばあちゃんと挨拶してたら？」妹の知美が俺の隣に座る。学校の制服を身にまとう知美にも、汗が浮かぶ。

「あとで、挨拶するよ」

知美は俺の背中についたほこりを払ってくれる。知美の指が背中に文字を書くようで、くすぐったい。

「喪服姿のお兄ちゃんを見るのって初めてだから、なんか新鮮」正直、喪服なんて買いたくなかった。

大学の入学式のためにスーツは買っていたが、喪服は必要ないと思つて買わなかつた。それに、俺にそんな機会が訪れることがないと思つていたから。喪服を買うなんて、夢にも思つていなかつた。

「お兄ちゃん、かつこいいか？」

「妹にそんなこと聞かないでよ。……でも、友達は、格好いいって言つてたよ」

「その子、紹介してくれよ」

知美が舌を出す。

「ヤダ」

二人のやり取りを埋めるように、蝉が叫ぶ。

深い悲しみがそこに横たわっていた。その悲しみがあまりにも深すぎるとき、人は誰よりも冷静でいられる。現実感もそうだ。どんなに悲しいときでも、冗談を言つたり出来るほど、俺たちはいつもどおりでしかいられなかつた。

どうやつて悲しんでいいか、俺には分からなかつた。

「おばあちゃん……元気だったのにね」

九十九歳だった祖母。

「一週間後には百歳だったのに」

「ああ……」

思い出がたくさんあったはずなのに、今でも覚えている思い出は数少ない。過<sup>う</sup>してきました時間も多いはずなのに、短い時間だったと感じる。

「あ、ネクタイ曲がつてるよ」

知美が俺の首元に手を持つてくる。

「もうすぐ社会人なんだから、ネクタイを締める練習しなきゃ駄目だよ?」

「難しいんだよ、なかなか」

どうやら途中から直すのは無理だったようだ。ネクタイを解き始める。俺はシャツの襟をたてて、ネクタイを締めやすくした。

「一人の会話はない。

ただ、蝉の鳴き声だけが響く軒下。広い庭、ヒノキの間に生える雑草、黒い革靴をよじ登る蟻。

細かな風景が、非現実的に感じる。

知美が俺の首にネクタイを巻きつけた。首から下がったネクタイの端を交差させて、一度小さな結び目を作る。

「知美、お兄ちゃん、まだ信じられないんだよ。ばあちゃんが死んだなんて」

結び目を手で握り、ネクタイの端、太いほうを結び目の中に通す。

「前に来たときは、あんなに元気だったのに」

玄関先で挨拶すると、奥の部屋から、まるで駆け出さんばかりに、祖母が飛び出してきた。しわくちゃの顔を、あらん限りの喜びで満たして、俺に抱きついてきた。年甲斐もなく大喜びする祖母に、俺は顔が引きつてしまっていた。

しかし、居間に手招きする祖母を見ていると、なんだか恥ずかしいようで、嬉しかった。

「ばあちゃんも、いつも同じジユースしか出さないんだよ。お茶菓子も、いつも同じ煎餅」

祖母の家の戸棚には、いつも同じお茶菓子が並んでいた。ハツカ飴と、丸いしょうゆ煎餅、黒くて甘い豆もあった。世代間の差か、若い俺の口に合わないものばかりだった。それに、いつも細長いサイダーの缶を呑まないか、と聞いてくる。もうそれは飽きた、と言つて、祖母は決まってお金をくれるのだった。

「年寄りには分からぬから、とか言って、お金くれるんだよ。俺、お金が欲しくてそんなこと言つたわけではないのにさ……」

上手く結べなかつたのか、ネクタイを締めなおそと解き始める。「仏壇に飾つてあるばあちゃんの写真をじつと見つめているとさ、にらめっこしている気分になるんだ。今にも笑い出しそうで、俺、負けではいけないような気がして、ずっと見つめ続けるんだ」

知美が、再びネクタイを俺の首に回す。

「結局、勝負は俺の負けなんだ。まったく、ばあちゃんはさすがだよ」

結び目を作つて、その中を通して。

でも、うまく大きな結び目を作れなくて、それを喉元に引き上げると不器用な形をしていて、また解く。知美はそれを繰り返していく。

「知美、無理するなよ」

「…………お兄ちゃん…………お兄ちゃん…………私…………」

黒いネクタイが、俺の膝の上に落ちる。

「…………おばあちゃんが…………死んじゃつたなんて…………信じられないよ…………」

泣きじゃくる知美の背中を、優しくなでてやる。シャツにしみこんでいく知美の大粒の涙。俺の胸の中で肩を震わせている。

「俺だつて我慢してゐるんだから。だから、泣くなよ。頼むから…………」

木にとまる蝉の姿がぼやけていく。

目頭が熱くなつて、あふれ出そうになる。

蝉はそんな俺たちなんか氣にも留めず、ただ歌い続ける。精一杯、

あらん限りの気力を振り絞つて。

「ばあちゃん、す「いよな。俺たちなんか及びもしないくらい、立派に生きたよな」

俺の言葉を聞いて、知美はついに大声で泣き出した。

俺のシャツを握り締め、蝉のように大声で。

赤ん坊のように、ただ泣くことだけにだけに力を込めて。

蝉は一週間しか生きられない。地中深くに何年もいて、やつと外に出れたと思ったら、歌える時間は一週間。夜は歌わないから、実際はもっと短い時間だろう。

ただ歌うことだけに全力を尽くし、そして、地面に落ちる。

「精一杯生きたよな」

九十九年と三百五十八日。ばあちゃんの生きた歳月。

「知美、俺……ばあちゃんに会つてくる」

知美は俺の胸から体を起こし、涙を拭ぐ。

「うん……おばあちゃんによろしくね」

いまだに止まらない滝のような涙をたたえて、知美は笑った。

「はい、ネクタイ。ごめんね、お兄ちゃん、私……」

「気にするな。ほら、ハンカチ」

「ごめん……ごめん……お兄ちゃん……」

笑みを作るはずの顔をくしゃくしゃにして、再び泣き出す。

俺の渡したハンカチを握り締めて、頬をこわばらせる。ハンカチを使おうともしないで、ただ涙を流し続ける。

醜い顔だと、笑おうとしたが、俺は笑うことが出来なかつた。

俺も人のことは言えそうにないから。

「行つてくる」

油蝉のかすれ声が、いつまでも耳にこびりついて離れない。

せめて、祖母が百歳の誕生日を迎えるはずだった一週間後まで、

精一杯歌つて欲しい。

生きることの出来る一週間を、精一杯、謳歌して欲しい。

俺はネクタイを締める。

蝉時雨が、次第に遠ざかっていった。

(後書き)

興味を持つてくださつた方、読んでくださつた方、ありがとうございます。感想、評価、栄養になります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4763a/>

---

一週間

2010年10月8日15時20分発行